

## 花山天文臺 第7回談話會記事

——昭和11年12月17日(木)14時開會——天文臺圖書室——

### 1. 稻葉通義氏：On the Moore's "Fourth Catalogue of Spectroscopic Binary"

——リク天文臺の Moore 氏が最近発表した分光連星の第4總目錄に就いて二三の統計を取つてみた。(この目錄の紹介は天界新知識 566 にある) 週期と軌道の楕率との間の關係は以前より知られてゐると殆んど同じで、週期が延びる程楕率も大きくなる。次に軌道運動以外の理由で視線速度の變化する星の速度曲線の形狀を表はすため、Moore 氏は軌道要素を求めてゐる。此の軌道運動でない軌道要素に就いても上と同じ關係を求めた所、矢張り週期と共に楕率が増加するのを認めた。併しこの場合、楕率の大きさは前のとは違つてゐる。次に重星の分光型の%を取つてみると B, A, F 型が最も多く 25% 前後である。更らに、この分光型に従つて週期の平均を取ると、早期型より晚期型に進むに従つて週期は大きくなつてゐる。

2. 荒木健兒氏：黃道光の觀測について ——豫定の通り尾道市に國際黃道光觀測所が設置されることになつた。場所は市の北方、高さ約 150 メートルの丘の上、東方に松永灣の燈火がわづかに見えるのみで、實に理想的である。從來は觀測數の多いだけで不確故、尾道の材料を基礎とし、經驗深い地方觀測者と協力したい。眼視的には、明るさの中心の位置、出現及び消滅の時、薄明の觀測から、一方には太陽や地磁氣の材料を入手して、統計的に太陽との關係、季節による變化、地球大氣との關係などを求めたい。更に、明るさの標準及び變化、色を正確に知るためには、表面光度計、比色光度計的に觀測を進める必要がある。寫眞的觀測も考慮されねばならない。これ等の諸問題は對日照についても調査される。理論を導出すにはまだ幾らか早いやうであるが、世界唯一の専門的觀測所であるから、責任の重大さを感じてゐる。

出席者：稻葉、柴田、公文、荒木(九)、堀井、荒木(健)、高城、木邊、山本(進)。